

読み替えられた「葉隠」

——その刊行と受容の歴史——

谷 口 眞 子

はじめに

前近代から近代に至る武士道の歴史を考察する場合、武士道を論じた作品が書かれた時代背景や著者の履歴を考慮しながら、内容を分析するのが常である⁽¹⁾。しかし、作成年代と同時期にその作品が読まれたとは限らない。たとえば「徒然草」は鎌倉時代に兼好法師が著したが、一般に広まったのは江戸時代である⁽²⁾。近年、読書論・読者論が盛んになり、読書ノートや蔵書目録から読者の「読み」が考察されているのは、作品の内容分析だけでは、そこに表現された思想の広がりや理解できないためである⁽³⁾。

「葉隠」もまた、編纂後どのように刊行され受容されたかを考察すべき対象といえる⁽⁴⁾。「葉隠」は18世紀初頭に作成され、武士道論では必ず言及される作品だが、日本思想史の分野では「葉隠」の一部（聞書一・二）を主な検討対象とし、そこから読み取れる武士道精神を論じるにとどまっていた。「葉隠」が明治期以降、いかに読み替えられていったのかについてはこれまで顧みられてこなかったのである⁽⁵⁾。「葉隠」は江戸時代を通じて写本で流通し、幕末には藩主や藩の要職にある人物が会読を行い、「葉隠聞書校補」という校訂・注釈書も編纂されたが、原本の「葉隠」が活字の抄録本という形で刊行されたのは明治39年、全集が出版されたのは大正5年、「武士道というのは死ぬこととみつけたり」の一節が知られるようになったのは、昭和に入ってからのことである。「葉隠」が作成されてから一般に広まるまで、200年を超える時を要したのであった。

本稿では「葉隠」が当初の編纂意図と異なる方向で読み・読まれ、提供されていった言説の歴史を考える。その際、著者や編者の履歴、出版社や出版地、版による違い、とくに題字・序文・論説の内容やその人物の政治的・社会的地位や佐賀との関係に留意

したい。そこから、出版時点における社会の興味関心をうかがうことができ、刊行者が「葉隠」をどのような文脈に位置づけようとしていたのかも推察できるからである。なお、昭和7年に相ついで佐賀出身の軍人たち——古賀連隊長、「爆弾三勇士」、空閑少佐——が勇敢に行動し、佐賀県の兵士や葉隠精神が注目を集めた結果、関係書籍が出版され、「葉隠」は忠君愛国精神のシンボルとなっていくのだが、紙幅の関係から昭和7年までを検討対象にすることを最初に断っておく。

第1章 江戸時代における「葉隠」編纂とその受容

第1節 「葉隠」と「愚見集」

「葉隠」は、山鹿素行『武教小学』や大道寺友山『武道初心集』のように、一般の武士を対象にした武士道論ではない。藩主の御側に仕える者の心構えと、御側仕えにとりわけ必要な、佐賀藩の歴史や習慣に関する知識（「国学」）を集めたものである。「葉隠」編纂は、二代藩主鍋島光茂に仕えていた山本常朝が、殉死禁止のため追腹を切れず、隠遁して10年近くたっていた宝永7（1710）年に、四代藩主鍋島吉茂から御役御免を言い渡された田代陣基が、20歳近く年上の常朝をたずねてきたことがきっかけだった。「葉隠」は2人の対談や史料調査を経て、享保元（1716）年に成立する⁽⁶⁾。その構成は次のとおり⁽⁷⁾。

夜陰の閑談（序文）

聞書一～二 逸話や教訓（常朝の直談）

聞書三 鍋島家佐賀藩祖鍋島直茂の事績

聞書四 初代藩主鍋島勝茂の事績と鍋島忠直

聞書五 二代藩主鍋島光茂、三代藩主鍋島綱茂、二代蓮池藩主鍋島直之、鍋島家姫君の事績

- 聞書六 佐賀藩歴代藩士の言行と史蹟伝説
 聞書七～九 佐賀藩歴代藩士の言行と評判
 聞書十 他藩の噂と由緒
 聞書十一 雑・補遺

「葉隠」は「夜陰の閑談（序文）」と聞書一～十一から成るが、聞書一・二がほぼ常朝の直談と考えられ、聞書十一にも彼の言葉がみられるのに対し、聞書三～五は佐賀藩祖と歴代藩主やその家族についての事績・言行、聞書六～九は佐賀藩の歴代藩士の言行や評判、聞書十は他藩についての叙述である。聞書一・二の逸話や教訓は、常朝が50歳になった宝永5（1708）年に、養子で31歳になる山本吉三郎に与えた「愚見集」と重なる部分が多い。一方、聞書三以下は、紀伝体——本紀（帝王の事績や国家の大事を叙述した部分）と列伝（家臣の伝記や諸外国の事を記した部分）——形式に類似している。「葉隠」が編纂された当時、佐賀藩では藩祖鍋島直茂と初代藩主鍋島勝茂の公譜編纂が始まっていた。聞書三・四はこれを補完し、二代藩主鍋島光茂以降を対象とした聞書五以降は、その後の公譜編纂資料にもなりうる内容であった⁽⁸⁾。

まず聞書一・二と関連が深い「愚見集」を紹介しておこう⁽⁹⁾。「愚見集」は第2章以降で述べる「葉隠」の抄録版や全集刊行の際に、「山本秘書」の名で附録として収録される史料でもある。常朝は新藩主——宝永4（1707）年、43歳で四代藩主となった鍋島吉茂——が国元に入部して、養子の跡取りが御番や役儀などを命じられたとき、その心構えができているようにという思いからこれを書いた。

「愚見集」は「奉公根本」（忠孝・武勇・慈悲・智恵）、「奉公枝葉」（風体・芸能）、「可慎」から構成されている。その内容は「葉隠」の聞書一・二と類似するところが多く、すでに常朝の中で奉公人の心構えに関する基本的な考え方はできあがっていたと思われる。

「奉公根本」のうち「忠孝」については、「忠孝といへは二つのやうなれとも、主ニ忠節を尽スが則親孝行也」「忠之肝要ハ諫ニ極ル」と断言しており、主君への忠義が親への孝行につながることを、忠義で重要なのは諫言であることを明確にしている。諫言するために家老の地位を目指すように忠告したり、主君から情けをかけられない中でする奉公が真の奉公であるという考え方は、「葉隠」にもみえる。「武

勇」では、武勇を天下にみせ、先祖の名をあげ、名を後代に残すと決めれば、それで屈強の武士が生まれるとしている。また、かりそめの言葉であっても心が表れるものなので注意するようにとしている。「武士の一言」は一步間違えば喧嘩口論に発展し、場合によっては喧嘩両成敗法が適用されて切腹が言い渡されることもあったので、日常的に言葉に対する感覚を磨いておくよう戒めたものと考えられる。「慈悲」では、武士は勇気を表に、大慈悲心を内に持つようにと述べた湛然和尚の言葉を紹介している。「智恵」については50年、100年先を見通すのが智恵であるが、世故に長けるのは害になるとも忠告している。以上から、奉公の根本は忠孝のために身命をなげうち、知仁勇を兼備することにあると結論している。

「奉公枝葉」の「風体」では、奉公人は容貌からその心を推しはかれるので、礼儀をただし、月代の剃り方から言葉使い、歩き方、視線の向け方に至るまで配慮するよう忠告している。「芸能」では、剣術・鉄砲・弓馬・軍法など、恥をかかない程度にたしなむようにし、一芸の者にならないようにと述べている。「可慎」では、淫洒、過言、遊興（遊山・博奕・囲碁将棋・夜話）をあげ、なかでも酒は悪事の根源であるとして、分量を決めて飲むことをすすめている。

「葉隠」の四誓願は武勇、忠義、孝行、大慈悲で、「愚見集」にみえる「智恵」の項目はないが、その内容は「葉隠」にもみられるので、基本的な考え方は共通しているといえよう。ただし、「葉隠」の聞書一・二が、数行の短い話を集めた形になっているのに対して、「愚見集」は項目ごとに教訓をわかりやすくまとめており、その点で大道寺友山『武道初心集』に通じるところがある。ただし、御役御免を言い渡され、失意の中で常朝をたずねた田代陣基を叱咤激励したと考えられる「葉隠」の聞書一・二のような迫力には欠けている。

次に聞書三以降について、『公譜』編纂との関係で考えてみたい。貞享元（1684）年、幕府が諸大名に対して、徳川家康以来の感状などを調べて綱吉の上覧に供するよう命じたことから、佐賀藩では藩主年譜や歴史書編纂が進んだ。とくに龍造寺家から鍋島家への継承の正当性、直茂・勝茂による鍋島家の統治体制の確立、光茂による三家格式（小城・蓮池・鹿島の三分家の格式）の制定を明らかにするこ

とが重要視された。光茂のあとをついだ綱茂・吉茂・宗茂の時代に、政治権力をめぐる動揺が繰り返されていたからである。その中で『鍋島直茂公譜』『鍋島勝茂公譜』は、「葉隠」と同時期の享保年中(1716～1735)に成立したと考えられている⁽¹⁰⁾。公譜は藩の公式歴史書であり、藩主やその家族の事績に重点が置かれているのに対し、「葉隠」では、鍋島家の構成員のみならず家臣についても名前を挙げて言行を論評している。多くは戦争での武功や殉死、大勇とも呼べるような奉公ぶりがとりあげられ、鍋島侍としての意気が称揚される傾向にあり、このような家臣あつての鍋島家である、という意味合いを言外に含んでいるとも考えられる。

以上から「葉隠」は、常朝が田代陣基へ奉公人としての心構えを説いた部分と、龍造寺家との関係を含む鍋島直茂以来の鍋島家歴代当主とその家臣たちの歴史に関する史料を、田代が収録した部分とから構成されていたといえよう。

第2節 「葉隠」の会読と「葉隠聞書校補」

江戸時代を通じて「葉隠」は刊行されることはなく、写本という形で主に藩内で流通した。読書会が開かれることもあった。天保12(1841)年、長崎港外の香焼島へ長崎警衛のために派遣された佐賀藩士の間で、毎月6・16・26の三日間、葉隠会が催されたという⁽¹¹⁾。弘化4(嘉永元、1848)年頃には、佐賀城下で葉隠の会が大組単位で定期的に開かれ、安政2年正月からは佐賀城竹の間で、藩主を交えた葉隠の読書会がはじまった⁽¹²⁾。また幕末の久留米藩に「葉隠」が伝わっていた可能性もあるという⁽¹³⁾。

ただし、藩校教育の場で教科書として採用されることはなかった。佐賀藩では、八代藩主鍋島治茂が天明元(1781)年に弘道館を設立している。弘道館教授の古賀精里——のちに寛政の三博士と呼ばれる——が昌平黌で教えるようになったため、文化2(1805)年に襲封した九代藩主鍋島齊直は、古賀精里の長子穀堂を弘道館教授に任命した。穀堂は、国政に役立つ有為の人材を育成することが、弘道館の教育の目的であり、藩の役職には弘道館出身者を選ぶよう提言した。天保元年、齊直のあとを継いで十代藩主となった鍋島直正は、士風の刷新と人材養成による藩政の立て直しを図り、天保10(1839)年に弘道館の校舎を拡張し、講堂や内生寮、武芸場などを設置して、全国有数の藩校とした。天保13年

には文武奨励と身分別の武芸修習目標が示された⁽¹⁴⁾。このように藩校教育は活発だったが、「葉隠」が使われることはなかったようだ。聞書三以降には歴代藩主や歴代藩士の言行が逸話も含めて書かれており、それを素材にするのははばかられたのであろう。

一方、鍋島直正の時代には、先述した『直茂公譜』と『勝茂公譜』を諸家の記録などにより追加・補筆する作業がはじまった。天保12年に『直茂公譜考補』、天保14年に『勝茂公譜考補』が完成し、二代藩主鍋島光茂については、天保15年に『光茂公譜考補地取』が編纂された⁽¹⁵⁾。『公譜』には出典が記されていないが、『考補』には典拠史料が明記されており、小川舎人の「焼残反故」などとともに「葉隠」も使われている。

公譜考補の編纂とともにすすめられていたのが、枝吉神陽による「葉隠」の校訂である。神陽は文政5(1822)年、枝吉種彰の長男として佐賀藩に生まれた。種彰は古賀精里・穀堂に師事して朱子学を学び、弘道館教諭となった人物で、60歳のときには江戸藩邸明善堂付きになった。嘉永元(1848)年に江戸から帰る際、湊川に立ち寄って楠公墓へ行き、安政3(1858)年には佐賀藩で楠父子像が龍造寺八幡宮に遷座したことを喜ぶ歌を詠じている。神陽は昌平黌で学んだ後、嘉永2年に江戸から帰国し、嘉永3年6月に弘道館教諭、8月に御什物方になった。嘉永3年に義祭同盟を結成し、弟の副島種臣や江藤新平、大木喬任、大隈重信らを育てたが、文久2(1862)年、41歳の短い生涯を終えた⁽¹⁶⁾。

神陽は、藩主鍋島直正の異母兄で直正の藩政改革を支えた鍋島安房、御年寄役の鍋島夏雲、中野兵次、相良宗蔵らと弘道館で「葉隠」を通読したところ、理解できない略言などがあり考補編集が必要だということになって作業を進めていた。嘉永～安政期に編集がはじまったと推定される「葉隠聞書校補」だったが、神陽がコレラで亡くなったため中断、その後相良たちによって整理されたらしい⁽¹⁷⁾。嘉永3年時点で相良宗蔵は御什物方を勤めており、藩内の古跡・器物・古書類を管理し、地理要害を調査して、史伝旧例と現行運用の実態を藩へ報告する任務を帯びていたという。神陽は相良と一緒に梅林庵(高伝寺末寺)へおもむき、そこで楠父子像をみて感激し、湊川で戦死した楠正成の命日である5月25日に有志を集め、勤王結社「義祭同盟」を結成した⁽¹⁸⁾。神

陽も8月には御什物方に任命されている。「葉隠」を校合し、弘化・嘉永期に藩士から提出された由緒書も利用しつつ、丁寧な注釈をつけているのは、御什物方という役職ゆえであろう。

近世を通じて鍋島家が抱えていた大きな政治的問題——龍造寺家から鍋島家への政権移行と、小城・蓮池・鹿島三分家と鍋島本家との関係——について、「葉隠聞書校補」はどのように扱っているのだろうか。「葉隠聞書校補」首巻には、「龍造寺之領地か鍋島領地二成候謂」という項目があり、龍造寺家から鍋島家への政権移行に関する歴史的出来事が、編年順に淡々と述べられている。領知目録、起請文、鍋島直茂から龍造寺政家への書状など、さまざまな史料が用いられているが、主観的な意見はみられない。三家との確執については同じく首巻に、「御三人之家不熟」という項目があるほか、「葉隠聞書校補」四の「先年小城・蓮池・鹿島御三人之御方江、公儀々御役等被仰付候」に、幕府から命じられた勅使馳走役の話や、二代藩主光茂による三家格式の制定過程が述べられているが、これも考証的立場から書かれている⁽¹⁹⁾。準歴史書として「葉隠」を扱い、それに綿密な注釈をつけていたといえよう⁽²⁰⁾。

第2章 明治時代における武士道論と「葉隠」出版

第1節 『武士道叢書』『現代大家武士道叢論』にみる武士道論

日露戦争は武士道論の歴史に大きな影響を与えた。明治38(1905)年5月には日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を日本海軍が撃滅、6月にはアメリカ大統領ルーズヴェルトが日本とロシアに講和を勧告し、11月にはポーツマス条約が批准された。このような情勢の中で刊行されたのが、『武士道叢書』と『現代大家武士道叢論』である。

井上哲次郎・有馬祐政編『武士道叢書』は上中下の三巻本で、上巻は明治38年3月、中巻は同年6月、下巻は同年11月に、東京日本橋の博文館からそれぞれ50銭で出版された。上巻は明治38年3月30日初版で、5月15日には早くも再版が出されている。明治42年10月30日には下巻の四版がでているから、かなり人気があったシリーズといえる⁽²¹⁾。

井上哲次郎は新設された東京大学哲学科の第一回卒業生で、明治17年ドイツに留学し、帰国後、日

本人としてはじめて帝大哲学科の教授になり、大正12(1923)年に退職するまで、哲学・教育の分野で勢力を持ち、退職後は貴族院議員となった哲学者である。『日本陽明学派之哲学』『日本古学派之哲学』『日本朱子学派之哲学』の三部作のほか、教育勅語の注釈書『勅語衍義』(明治24年)により忠君愛国精神を鼓吹し、『教育ト宗教ノ衝突』(明治26年)ではキリスト教を国家主義的立場から批判した。『武士道叢書』で述べられた日本民族の精神についての考え方は、以後『国民道德概論』(大正元年)、『日本精神の本質』(昭和9年)、『戦陣訓本義』(昭和16年)などに受け継がれていく⁽²²⁾。

『武士道叢書』上巻は「軍人勅諭」を冒頭にかかげ、井上哲次郎が明治38年3月付で序を書いている。日本は維新以降、西洋文明を輸入してそれを咀嚼したが、一方で、2500年あまりの歴史を有しており、清やロシアに勝ったのは武士道の精神によるとしている。文明の利器を集めても、それを運用する精神がなくては意味がなく、武士道の精神こそが民族の「大根本大骨頭」であると主張し、「武士道の発達を研究し、教育に由りて之が精神を修養し、以て我民族の自衛発展を企画すること、是れ豈学者の当に平生務むべき所」であり、「『武士道叢書』によりて得る所は、即ち武士道の形骸にあらずして、其精神にあること、是れ学者の深く思を致すべき所」と明言している。上巻には「日本宝訓」(天皇の勅語)、「日本忠訓」(公家の言葉)、中江藤樹「文武問答」、熊沢蕃山「集義和書抄録」、山鹿素行「士道」「武教小学」などが所収され、いずれも作品の前に著者の略伝を載せている。上巻刊行の際には、法令や詩歌も収録して、「日本固有の道德を発揮し、以て将来の国民教育に資する」ことを目的としていたようだが、紙数の関係で収載されていない。中巻には北畠親房「神皇正統記」や長沼澹斎「兵要録抄録」、下巻には片島武矩「武備和訓」、林子平「海国兵談抄録」、藤田東湖「弘道館記述義」などが収められている。「葉隠」が含まれていないのは、まだ活字本が刊行されていなかったためだろう。

上巻末尾には博文館刊行の書籍の広告が掲載されている。日露戦争中であるため、『軍艦詳説』『海軍兵器説明』や、田山花袋『第二軍従征日記』、大山元帥や児玉大将をはじめとした軍人や戦局の様子を撮影した数百枚の写真を収める『奉天占領記念帖』が発売されていたことがわかる。また、井上哲次郎

『巽軒講話集』や、井上が跋文を書いている赤堀又次郎校訂『心学叢書』、大隈重信の口述筆記『大隈伯時局談』などの広告ものっている。『武士道叢書』中巻には上巻の宣伝文句として、「武士道の盛衰は直ちに我が国運の隆替に関す、古人曰く、武は矛盾にあらず勉めて忠孝節義を練ると」とみえる。東京朝日新聞と日本新聞の書評も転載されており、日本新聞は、「吾国民の精神は武士道に依て支配せらる古人が如何に此道に依て修養をなしたるかを此の書に依て窺ひ且つ之れに依て心意の鍛錬を為すことは我國民目下の急務といふべし」と評している。下巻末尾の宣伝からは、嘉納治五郎が序文を与えた有馬祐政編『孔子言行録』も刊行されていたことがうかがえる。

『武士道叢書』と同じ明治38(1905)年の12月になって、秋山梧庵編『現代大家武士道叢論』が博文館から刊行された²³⁾。陸軍少将の佐藤正が題字「忠魂義膽」を寄せ、井上哲次郎が序で、現今諸家の武士道論をまとめたこの書と『武士道叢書』を併せて読めば、武士道の過去と将来について得る所があるだろうと述べている。編者秋山は、ヨーロッパからの文明・文物輸入があっても、それを受容し活用する精神は「日本民族の普遍的に固有せる道德の根底」たる武士道であると考えており、『武士道叢書』にみえる武士道への見方と同じである。本書には、武士道論のほか日露戦争に関する時局講談・評論も収載しており、新聞や雑誌に掲載された論説を年月順に並べている。新渡戸稲造の『武士道』はまだこの時点で日本語訳が出版されておらず、井上哲次郎は論説「武士道と将来の道德」で、「近頃新渡戸稲造と云ふ人が英文で武士道と云ふ事を著はしまして」と語っている。また福沢諭吉が「瘦我慢の説」で、勝海舟が江戸城を無血開城し、その後、明治政府の官僚になって得意げであったと批判したことに対し、福沢自身が「一戦も試みずして忽ち外来の道德主義に降参し己が城壁を明け渡して仕舞つた」と断じている。

本章第3節でとりあげる『鍋島論語葉隠』(抄録版『葉隠』の再版本)に題字を寄せることになる渡辺国武は、雑誌『太陽』に掲載した「武士道の話」が収録されている²⁴⁾。「葉隠」は、武道において決しておくれをとらないことを眼目とし、武士道の「意気地」を詳細に論じたものと紹介している。ただし渡辺の主張は、武士道の「意気地」を実業に応

用し、日露戦争の目的たる国民経済力の発展を望む点にあった。「武門武士が出陣して、死生の地に立ち、腹切仕事をする積りで、実際に之を応用したならば、日本は世界第一の武士道国であると同時に、世界第一の実業国になるであらふと思ふ」と述べている。

本書では、9月18日に開催された尾崎行雄率いる東京市教育会第1回講談会で、早稲田大学の浮田和民が行った演説が新聞で紹介され、それをめぐって起きた論争について、各論者の意見がまとめられている。浮田和民は安政6(1859)年、熊本に生まれ、熊本洋学校に入学、洗礼を受けた。同志社英学校を卒業後、伝道活動に従事したが、明治25年からエール大学へ留学し、帰国後同志社大学教授として史学と政治学を講義するようになった。明治30年、東京専門学校(早稲田大学)に移り、明治42年からは雑誌『太陽』の主幹を兼務して立憲主義論を精力的に展開し、大正デモクラシー運動初期の思想家となった人物である²⁵⁾。

浮田は、義務のために死ぬのはよいが名誉のために死ぬのはよくないとした上で、戦場で自殺する者の多くは名誉のために死を望むが、捕虜になっても恥と思うことはなく、敵国に遊学したつもりでいればよいと演説したらしい。これに対して、陸軍少将佐藤正は10月2日に「学者の邪説を破す」と題する論説を寄せ、物質的条件や技術的条件が同じ場合、勝利の鍵を握るのは個々の軍人の精神的要素＝士気であるとし、「あはれ此大敵を踏破つて祖国の誉れを全うし、一死以て祖先の名に殉せん哉」と思うくらいの気概がなければ、戦うことはできないと反駁した。また浮田が拳国一致に反対したことについても、ロシアが東進して日本を威圧している状況下で、日本人は「子孫をして亡国の民たらしむる事は出来ぬ、といふの国命を賭して戦つて居るのだ」とも主張している。井上哲次郎は浮田の演説速記を取り寄せて、内容を確認した上で、10月17日の東京市教育会第2回講談会にて「浮田、佐藤両氏の論争に就て」と題する演説を行い、浮田の「非名誉戦死論」「非拳国一致論」をとりあげた。軍人は本務として戦死するのであり、名誉は本務を尽くすことで生じると説明、さらに青年が困苦に耐えられず、華嚴の滝や浅間山の噴火口に身を投げるのは卑怯だが、戦争で敵に降参しないのは卑怯でも臆病でもなく、戦場で軍人の自殺は別に考えるべきだと主張

した。その後も浮田、佐藤、井上の間で主に戦争での捕虜と自殺に関する論争が続いた。浮田はクリスチャンで、井上はキリスト教攻撃の立場、佐藤は西南戦争に参加し、日清戦争では歩兵連隊長として出征し負傷して退役した人物だったから、生死や忠義の考え方について対立する部分が多かったのだろう²⁶⁾。

博文館は、かつて帝国大学総長をつとめ、明治38(1905)年に帝国学士院長になった加藤弘之にも意見を求めた。加藤は、決して捕虜にはならないという精神があるからこそ、死ぬことを何とも思わず戦えるとしながらも、捕虜になっても敵に勝つ見込みがある場合は、一時の恥は忍んでも生きる方がよいとし、軍人たる義務を全うするために死ねばそれが軍人の名誉になるのだから、義務と名誉は区別できないとの見解を示した。

武士道が注目される中、抄録版ながらはじめて『葉隠』の活字本が刊行されたのは、『現代大家武士道叢論』が出版されて、わずか3ヶ月後のことである。

第2節 抄録版『葉隠』の出版

明治39(1906)年3月23日、中村郁一編『葉隠』が出版された。聞書一・二を中心に、分量を五分の一ほどにした抄録本『葉隠』を、東京の丁酉社から刊行したのである。聞書一・二は心構えを説いた部分なので、一般に受け入れられると考えたのであろう。抄録ではあるが「葉隠」活字本の最初である。定価は60銭であった²⁷⁾。中村郁一は明治13(1880)年に生まれ、佐賀師範学校を卒業して小学校の教員をしていたらしい。26歳のとき、弘文学院で授業を担当していた松本亀次郎に「葉隠」の抄録を送ったところ、嘉納治五郎がそれをみて出版をすすめ、刊行を決意したという²⁸⁾。嘉納治五郎は講道館柔道の創始者として知られるが、東京高等師範学校校長だった明治32(1899)年に清国留学生のための塾を開き、これが明治35(1902)年に弘文学院(明治36年に宏文学院と改称)となった。東京の牛込西五軒町にあり、本科と速成科に分かれ、本科卒業生は帝国大学や高等師範学校などへ無試験で入学できる制度だったという。敷地は約2000坪、在院生徒は200余名で、学院長が嘉納治五郎だった²⁹⁾。嘉納は「佐賀養士之風存於此矣」という言葉を寄せた。

新渡戸稲造は明治39年2月18日付で序を書い

ている。新渡戸はその著『武士道』で有名だが、これは外国人を読者に想定して英文で書いた本であり、明治32(1899)年にアメリカで、翌年日本とともに英語版が出版された。明治38(1905)年の第十版の際に増訂し、アメリカと日本で刊行されたが、これも英文のものである。桜井鷗村の日本語訳は明治41(1908)年に出版された。つまり、『Bushido』の英文増訂版が日本で発売された翌年に、新渡戸は『葉隠』に序を寄せたことになる。日露戦争開戦時に新渡戸は京都帝国大学教授だったが、序を書いた明治39(1906)年には法学博士となり、旧制第一高等学校校長に就任した。彼は、武士道は「政治制度の如何に拘はらず社会の変遷如何を問はず日本の民族歴史に現はれたる以前既に此精神気魄は大和民族の心理に胚胎せり」として、日本固有の思想であり、武士が出現する前にすでに存在した大和民族の精神であると考えている。ただし、洗礼を受けた新渡戸らしく、武士道はキリスト教と近接性をもつと考え、その道徳は武勇を経過して「穏順」の域に達するだろうとも予想している。そして、『葉隠』は古めかしいようにみえるが、そこにみられる固有名詞を取り去れば、20世紀にあっても「実行的作用」を持つだろうと述べている。

本書には目次がない。「葉隠」と書かれた表紙、嘉納治五郎の題字と新渡戸稲造の序文、中村の自序、例言とつづき、「漫草 松盟軒主」のあとに漢字仮名交じりの原文で「葉隠」が抄録されている。そのあと「葉隠 附録」として、石田一鼎・山本常朝・田代陣基の略伝、「用鑑抄」(石田一鼎)、「山本秘書」として常朝の奉公根本・奉公枝葉・餞別(「愚見集」のこと)、直茂公御壁書二十一箇条、願溪法師の言葉と漢詩が収録されている。

自序で中村は、「葉隠」は晴れの出すべきものではないかもしれないが、かといって朽ち果てさせるのも惜しく、佐賀城の周囲にはその実が残っているので、新たな庭に「葉隠」を移し替えると謙虚に述べている。ところが、5年後の再版本はさまざまな点で異なっていた。

第3節 『鍋島論語葉隠』

——抄録版『葉隠』の再版——

抄録版『葉隠』は本のタイトルを『鍋島論語葉隠』と変えて、明治44(1911)年2月15日に80銭で再版された。出版社は佐賀市元町にある平井奎文館

である。抄録部分に変更はないが、興味深いのは書簡や題字、序文などを寄せている人物である。表紙中央には「鍋島論語葉隠」とあり、右側には「陸軍大將伯爵乃木希典閣下書簡」「子爵渡邊國武閣下題字」「子爵渡邊昇閣下題字」「甲南嘉納治五郎先生題字」、左側には「法学博士農学博士新渡戸稲造先生閱竝序」「法学博士織田萬先生序文」「日南福本誠先生評論」とある。嘉納治五郎の題字と新渡戸稲造の序はすでに初版『葉隠』にあったが、それ以外は再版本で新たに挿入された³⁰⁾。

編者中村郁一は「第二版の巻頭に自序す」で次のように述べている。

二百余年の昔に咲き出て。葉隠に散り留まれる花。明治の御代の晴の庭に移し植ゑて。色香愈々かぐはしく。畏くも雲井遙かに九重の。奥に色香を御覧ぜらる。葉隠の幸いかばかり。葉隠のほまれいかばかり。かばかりの誉。かばかりの幸を。空しく筐底に秘め置かんも。あまりに本意なく思はれて。茲に第二版を出すこととしつ。

帝国の新領土なる半島の主都倭城台下の鶉居に於て併合第一回の紀元節を迎へたる

「畏くも雲井遙かに九重の。奥に色香を御覧ぜらる。」とあるのは、天覧を意味している。その証拠として、本書には宮内大臣手簡の写真が掲載されている。『葉隠』二冊が中村郁一より「聖上 皇后両陛下へ献納願出ノ趣ヲ以テ伝献被致候ニ付 御前へ差上候、此段申入候也」とあり、明治39年5月23日付けで、宮内大臣子爵田中光顕が侯爵鍋島直大へ送ったものである。

田中光顕は天保14(1843)年、土佐の郷土の家に生まれ、中岡慎太郎らとともに薩長連合の成立に尽くし、第二次長幕戦争で幕府軍と戦った人物である。明治4年には岩倉使節団に加わって欧米諸国を視察、帰国後陸軍省に入って、西南戦争では兵站事務を統括した。陸軍少将、元老院議員、警視總監などを経て、明治31年から11年余りにわたり宮内大臣をつとめた。鍋島直大は弘化3(1846)年に藩主鍋島直正の嫡子として誕生し、文久元(1861)年に襲封した最後の藩主である。上野戦争では江戸城本丸で指揮を執り、明治2年、薩・長・土と版籍奉還を建白した。明治4年からイギリスへ留学し、

明治12年から外務省御用掛や元老院議員、貴族院議員、宮中顧問官などを歴任した³¹⁾。中村は旧藩主を介して、『葉隠』を天皇皇后両陛下に献納することで、『葉隠』を権威化しようとしたのである。再版本では表紙の次の頁に「賜天覧」と大字されている。

中村の自序に「帝国の新領土なる半島の主都倭城台下の鶉居に於て併合第一回の紀元節を迎へたる」とあるのは、1910年8月に韓国併合条約が調印され、韓国の全統治権を日本に譲渡することが決定し、朝鮮総督府が置かれた京城(現在のソウル)に中村が住んでいたことを示している。紀元節(2月11日)は神武天皇即位の日だから、朝鮮を併合した帝国の祝賀というニュアンスが含まれていると解釈できよう。

陸軍大將で伯爵の乃木希典の書簡は写真が掲載されている。消印は明治39年6月20日、中村郁一あてで、手紙の文面には、『葉隠』を恵贈され朝夕読んで実行するよう心がけているとあり、よき師父を得た思いであるとみえる。ただし、「何カ揮毫可致トノ儀ハ乍赤面御辞退仕候」と書かれているので、乃木が中村から揮毫を依頼され断ったことがわかる。

乃木は嘉永2(1849)年に長府藩士の子として江戸藩邸で誕生、明治2年に伏見御親兵に入営し、明治4年に陸軍少佐となった。西南戦争で軍旗を喪失したことはよく知られている。明治18年に陸軍少将となり、翌年ドイツへ留学、日清戦争では歩兵第一旅団長として旅順を攻略し、28年に陸軍中将、男爵となり、29年に台湾総督をつとめた。日露戦争では第三軍司令官として旅順攻撃を指揮し、二人の男子も戦死している³²⁾。

法学博士の織田萬も文章を寄せている。彼は明治元年に佐賀藩士の子に生まれ、帝国大学法科大学を卒業後、ドイツとフランスに留学し、帰国後京都帝大教授となった。大正10(1921)年から昭和6(1931)年まで国際司法裁判所判事としてオランダでも活躍、その後、貴族院議員になる人物である³³⁾。東京遊学中に「葉隠」の存在を知り、郷友青年会で写本を作成した際に拾い読みをしたという。「武士道と云ふことは死ぬことと見付たり」や「毎朝毎夕改めて死ぬ死ぬと常住死身に成つてゐるときは武士道に自由を得」という一節が印象に残っていたらしい。織田は「近ごろ青年墮落のうはさ高く」「今

の世の青年に自らかくこそと覚悟するに足るべき何物かの暗示を得しめんことこそ肝要ならめ」と考えていた。それを「葉隠」が果たすのではないかと述べている。

青年墮落とあるのは当時の世相を表している。日本は日露戦争で100万人を超える兵力を動員し、国家予算の約6倍の戦費を消費した。にもかかわらず、ポーツマス講和条約で賠償金が得られなかったことから、戦後の日本は国債の償還など財政的困難に直面した。国民の間に芽生えた個人主義・享楽主義の是正を目指し、勤勉と節約を求める戊申詔書が明治41(1908)年に発布され、地方改良運動も進められていた。ちなみに、新渡戸稲造は明治44(1911)年に『修養』を出版し、若者に対して自己の修養をいかに行うかを論じている。当時の知識人たちは、青年の精神のよりどころとして修養が重要であるとの認識を共有していた。

「福本誠先生評論」は、明治40(1907)年10月1日発行の『中央公論』第22巻第10号に掲載された福本日南の論説を、再録したものである。福本は安政4(1857)年福岡藩士の家に生まれ、北海道や上海で事業を試みたあと、明治22年に『日本』を創刊し、欧化主義に対してナショナリズムとしての国民主義を主張、日清戦争時には戦地も巡視した。『九州日報』の社長兼主筆をつとめ、明治41年～45年には衆議院議員として活動している³⁴⁾。

福本は、日本国民の精神の修養に資すべきものとして、日清・日露戦争に勝利して忘れかけている武士道を唱導するのは好ましいとして、「葉隠」の四誓願を解説している。「武士道に於ては後れを取り申間敷事」では、「ファナチズム」(ファナティズム＝狂信・熱狂)との評価もあるかもしれないが、この精神こそが日本魂であり、世界の六分の一を擁するロシアに勝利した日本を創りだしたとみている。「主君の御用に立つ可き事」については、孔子が大將軍、孟子が副將軍になって日本に侵攻したら容赦なく打ち払うと応えた、山崎闇斎の逸話に似ていると考えている。闇斎学派は幕末まで継承され、崎門派の1人である浅見綱斎の「靖献遺言」はその弟子若林強斎を通じて、幕末の志士に影響を与えたといわれているので、引き合いに出したのかもしれない。「親へ孝行仕る可き事」では、両親のありがたさを感じる心持ちが、親に感応すると説明している部分を評価し、「大慈悲を起し人の為に成る可き

事」については、武士道の尊ぶべき点であるとしている。そして四誓願に「信義を守る可き事」「品格を重んず可き事」「万事に注意す可き事」を加えて、武士道の綱領と考えている。そのほか子爵小笠原長生、子爵渡辺国武、子爵渡辺昇は題字を、副島種臣は談話をのせている³⁵⁾。

中村は再版時に陸軍・海軍関係者、帝大教授、貴族院議員、衆議院議員などから題字や序文、さらに評論を集め、「鍋島論語」として抄録本『葉隠』の再版本『鍋島論語葉隠』を刊行し、世間の目を引きつけようとしたのだろう。

第3章 『鍋島論語葉隠全集』の刊行

第1節 初版『鍋島論語葉隠全集』の刊行

中村郁一は大正5(1916)年に「葉隠」の全集を刊行した。出版したのは11月3日の明治節(明治天皇の誕生日)である³⁶⁾。従兄弟の中村常一郎は「本書出版の経過」(大正5年9月付)で、「葉隠」が抄本しか出版されてこなかった理由を2つあげている。第1は全本が大部にわたるため営利事業として難しいこと、第2は葉隠教育を受けた70歳以上の人々より若い世代にはなじみがないことである。「葉隠」には、佐賀藩の内部事情に関する記事などもあり、全文出版は「葉隠」の威厳を損ねるという意見もあったようで、当初は抄録出版を考えていたが、記念出版であること、福本日南や横山健堂など佐賀出身者でない評論家をはじめ、大隈重信が全文刊行を強く求めたことにより、葉隠記念出版会が全集版を2円50銭で出版するに至ったという。

「記念出版」とあるのは大正4年11月、大正天皇の即位大礼にともなう叙位・叙勲で、石田安左衛門(石田一鼎)が贈位(正五位)されたことによる。本書冒頭の「記念出版之辞」によれば、「佐賀藩武士道の経典「葉隠」の淵源を為し、功労を追賞せさせ給ふに由ると漏れ承る」とあり、常朝の思想形成に大きな影響を与えたとして、石田一鼎の功績がたたえられたことを記念して本書を出版し、石田一鼎、山本常朝、田代陣基3人のために葉隠記念碑を建設する計画だったらしい。

石田一鼎は寛永6(1629)年に佐賀藩士石田実之の長男として生まれ、幼い頃から学問が好きだったという。17歳で父の跡を継ぎ、知行250石を拝領して初代藩主鍋島勝茂の近侍となった。その後、二代藩主鍋島光茂の側役となるが、寛文2(1662)年

に勘気に触れて、鍋島家の分家鍋島直能に預けられ、小城藩領松浦郡山城郷に8年間幽居した。寛文9年に許されて佐賀郡下田に移住し、延宝5年に知行100石が養子へあてがわれたことを機に、剃髪して一鼎と号した。『要鑑抄』を書いたことで知られている。

全集が世に出るきっかけを作った大隈重信は、大正5年8月付けで巻頭の序を記している。「葉隠」は時代遅れのようにみえるかもしれないが、その教訓は現代にも顕著な効果をもたらすと確信していたようだ。大隈は、植物を移植してもその土壤に合わないならば育たないように、いかなる外来文明もその国民性と適合しなければ、害があるだけだと考えていた。そして、葉隠の四誓願は中国由来の儒学の仁義忠孝を言い換えたものだが、そこには「万丈の気焰」がみられるとする。大隈は「葉隠」を教訓書としてとらえ、その全文出版が「外国の遊惰なる風を排拒して内国の発達力を充実」させる一助となることを願っていた。

彼がこの序文を寄せた2年前の大正3年4月、日本では第二次大隈重信内閣が成立していた。この年の7月にオーストリアがセルビアに宣戦布告し、第一次世界大戦が始まり、日本も8月にドイツへ宣戦布告する。ドイツの根拠地青島と山東省の権益を接収し、大正4年には加藤高明外相が中国大總統袁世凱に二十一箇条の要求を提出、承認させた。大正5年7月には第四次日露協約を結び、中国が第三国に支配されるのを防ごうとした。同年10月、大隈首相は辞表を提出し、内閣は総辞職することになるのだが、その2ヶ月前にこの序文を寄稿していたのである。

中村郁一の自序は、抄録版『葉隠』が明治天皇の天覧を受け、乃木希典に愛読されたと強調している。「乃木將軍は明治時代に於ける武士道の権化として、世道人心を感奮興起せしめ、一世に尊崇せられ又末世に景仰せらるゝ靈界の偉人なり」と賞賛し、その権威をもって「葉隠」の価値を高めようとする意図がうかがえる。

本書には「葉隠」全文のほか、武士道用鑑抄、山本秘書、直茂公壁書二十一箇条、福本日南先生評論、横山健堂先生評論、難句略解が収録されており、冒頭には葉隠解題もついている。明治44年の抄録再版本の目次と比べてみると、副島種臣の談話が消え、横山健堂の評論が挿入されている。横山健堂は

明治5年生まれの評論家で、東京帝国大学を卒業し、明治41年から「黒頭巾」の名で「読売新聞」に「新人国記」を連載し、のちに駒澤大学教授になった人物である³⁷⁾。大正5年9月付けの原稿は、大正3年に大阪毎日新聞に連載した原稿を加筆修正したもので、「葉隠集全部の刊行は我輩の理想にして、又た江湖に向つて力説したところなり」とあり、署名は「黒頭巾」となっている。なお、この初版には東郷平八郎が「積誠動四海」という書を寄せている。

全集は大正5年に初版がでたあと、大正6年に再版、大正7年に三版を重ねた。三版には、大正6年5月23日に佐賀市で開催された乃木会——乃木希典の死後創設され、武士道と質実剛健を説く修養運動を展開した——で、乃木会副会頭の陸軍中将堀内文次郎が行った演説が、西肥日報から転載され、「乃木將軍と鍋島論語葉隠」として収録されている。文久3（1863）年信濃に生まれた堀内は陸軍士官学校卒で、「陸軍省沿革史」を執筆し陸軍中將となった³⁸⁾。演説では、乃木がドイツのゴルツ元帥と会い、二人で人心の墮落を憂いたことをあげ、その精神が山本常朝が詠んだ「みな人は江戸へ行くらん秋の暮」と同じであるとしている。また、愛国婦人会に無名寄付をしたのが乃木夫人であることがわかり、「大慈悲心を發揮せし者は、乃木閣下御夫婦なるべし」とたたえ、四誓願のひとつ、大慈悲心を実現していると評価している。堀内は愛国婦人会創立につくした人物でもあったので、このような情報が入ったのだろう。さらに「鍋島家は私一人にて背負つて立つべし」と常朝が豪語したことをあげ、「乃木閣下の殉死は世の軟弱に流るゝこと滔々たるを見て『吾一死以て之を抱止めん』と云ふ大抱負心に基くものゝ如く、彼の山本の傲語と符節を合するものあるを覚ゆ」とも述べている。要するに、乃木に葉隠精神が息づいていると主張しているのである。

こうして時の首相大隈重信や乃木希典の名声を借り、石田一鼎をたたえつつ、「葉隠」全集を葉隠記念出版会が世に出したのだが、大正7年の三版後は昭和7年まで出版されなかった。大正9（1920）年には戦後恐慌が起き、大正10年には首相の原敬が暗殺されるなど、「大正デモクラシー」という言葉の響きとは裏腹に、大正期の経済は決して豊かではなかった。大正12年の関東大震災で紙型が焼失したことも出版の障害となっただろう。そのような

中、地元佐賀では、学校関係者が「葉隠」の一部を含んだ本を教訓書・修養書として編纂することになる。

第2節 肥前史談会と葉隠研究会

古賀説一編『葉隠の雫』は大正9(1920)年、佐賀市天明堂から刊行された³⁹⁾。序文を書いた3人はいずれも学校関係者である。佐賀中学校長の千住武次郎は、畏友の古賀が職務の合間を縫って先賢名婦の事蹟を調査収集し、児童教養の向上を目指した、と本書の意図を紹介した。佐賀県師範学校長の副島松一は、修身のように「大ニ感情ヲ陶冶シ意志ヲ鼓舞セントスル教科ニ於テハ生徒ニ適切ナル例話事項豊富ニ準備シ置ク必要」があるとし、社会各方面の人物の逸話言行を収めた本書は、過去の偉人の功業を子孫へ伝えとともに、青年子弟の感化に役立つと述べている。佐賀県師範学校附属小学校主事の牧秀賢も、修身を講じる者が理論に偏重して例話の重要性を認識していないとし、道徳は実践を勧奨するものであるから、児童学生の心理に共鳴するようなものでなければならないとしている。

著者古賀説一は、本書を小学校の修身授業の補充教材として使うために編纂したが、県下の青年学生の座右の友たることも希望していた。目次をみると、山本神右衛門〔常朝〕や石田一鼎など「葉隠」関係者と考えられる人物は、七分の一ほどにすぎない。儒者の古賀精里や古賀侗庵、幕末の蘭医でシーボルトに学び幕府の種痘所を開いた伊東玄朴、佐賀の七賢人といわれる江藤新平・枝吉神陽・副島種臣・大木喬任・島義勇・佐野常民・大隈重信、鍋島直正に殉死した古川松根らがとりあげられている。発明家、事業家、農事功労者、篤農家、貯蓄家の功績も具体的に説明されている。『葉隠の雫』は、文字通り「葉隠」がもたらした雫というわけである。文章は漢字仮名交じり文で口語体であるが、各章の余白には漢詩や和歌が挿入されており、祖先に尊敬の念を払い「報本反始」(『礼記』にみえる言葉で、祖先の恩に報いること)の美德を涵養する目的があった。

その後、佐賀では大正末に肥前史談会が発足した。大正5年3月に、前年にできた東京の佐賀郷友青年会の史談会に刺激されて肥前史談会が発足したが、1年ほどで活動休止になっていたのが、再度発足したのである⁴⁰⁾。昭和2年12月発行の『肥前

史談』第一巻第一号の題言に、「肥前史談会が創立せられたるは、実に光輝ある歴史を永遠に伝ふると共に、尊き遺蹟の保存に努め、又一面隠れたる幾多の事蹟を調査研究して之を天下に闡明し、以て歴史上及び社会教化上に資せんとするに外ならないのである」と謳われている⁴¹⁾。この創立趣旨に基づいて、講演会や史跡巡見などが開催された。『肥前史談』第三巻第六号(昭和5年)⁴²⁾には、史跡巡礼で常朝の墓参が行われたことを記念した常朝の紹介文がみえる。昭和4年秋に、史談会再発足の提唱者、八谷大麟(佐賀市天祐寺住職)の呼びかけで、久米邦武編述の『鍋島直正公伝』(全7巻、大正6~10年)と「葉隠」の輪読会が開始された。『直正公伝』は毎月7日、『鍋島論語葉隠全集』は石田一鼎命日の21日に行い、八谷、鶴清氣、西村謙三、千住武次郎、栗原荒野らの家を回り持ちで会場にしたという⁴³⁾。輪読会のメンバーの1人だった鶴は、佐賀県の小学校長講習会での講演記録を加筆修正して『鍋島論語葉隠概論』にまとめ、昭和5年に佐賀市の平井書店から30銭で出版した⁴⁴⁾。

昭和5年7月には葉隠研究会が県立図書館に設立された。『肥前史談』第三巻第八号⁴⁵⁾の雑録には、「郷土の誇りとして居る葉隠れの気風漸く廢滅に帰せんとするを憂へ道義觀念の挽回と世道人心の覚醒とに資する為め葉隠研究会を設立」するに至ったこと、松原神社社司の鶴清氣を講師に招いて「葉隠」講演会を開くことになった旨、告知されている。また、葉隠研究会設立趣意書も掲載されている。趣意書では、維新前後に佐賀から多くの逸材を輩出したのは、葉隠精神の発露にほかならないが、葉隠教育を受けたのは古稀に達した人に多く、とくに「一知半解の皮相の見を以つて、葉隠は封建時代の遺物であつて昭和の今日には全く適合せないなどと誤解して居るものもあるやうである」と危惧している。『肥前史談』第三巻第十号(昭和5年)⁴⁶⁾には、県立佐賀図書館主催第1回葉隠研究会講演の概要として、栗原荒野「葉隠の成立に関する考察」が掲載されている。『肥前史談』第五巻第一号(昭和7年)⁴⁷⁾冒頭のリストには、史談会の会長西村謙三ほか、幹事に八谷大麟、鶴清氣、栗原荒野、評議員に千住武次郎などの名前がみえ、輪読会が佐賀の郷土史を牽引するきっかけになったことがうかがえる。

第3節 改撰4版『鍋島論語葉隠全集』の刊行

この動きと呼応するかのように、中村郁一は『鍋島論語葉隠全集』を昭和7（1932）年に改撰4版、昭和9年に改撰5版、昭和11年に改撰6版と立て続けに出版した。改撰4版は、朝鮮京城府の中村郁一が著作者・発行者、印刷所は京城府の大海堂印刷株式会社で、発行所は佐賀市の佐賀郷友社、発売所も佐賀市の大坪惇信堂となっている。定価は4円であった。

昭和7年3月25日刊行の改撰4版は、大隈重信没後十周年の記念として刊行された⁽⁴⁸⁾。冒頭には、「改撰したる本書を恭しく故 侯爵大隈重信閣下の御霊前に捧げたまつる」「葉隠士風の尊崇者にして、且、曩日、本全集の刊行に深厚なる賛助を賜はりたる、故侯爵大隈重信閣下の十周年の忌辰に際り、久しく絶版の姿に在りし本全集を改撰して、故侯爵閣下の御霊前に捧げ、以て慰霊の誠を致し、併せて江湖に之が普及を図らんとす」とみえる⁽⁴⁹⁾。

また侯爵大隈信常が昭和7年正月の日付で序文を書いている。信常は明治4年8月生まれで、明治35年に大隈重信の養子となり、欧米留学後、早稲田大学教授、早稲田中学校長を歴任、のち早稲田大学名誉総長になった。大正3年から大隈首相の秘書官をつとめ、大正4年に衆議院議員、大正11年に貴族院議員になっている⁽⁵⁰⁾。信常は序で、葉隠は我が国武士道の精華を発揮したものであり、「燃ゆるが如き奉公の至誠と、純忠無我の思想とに基づき、我が国固有の純粹無垢にして、且つ天真爛漫たる精神気魄を発露したもの」と位置づける。そして、「葉隠は大和魂の結晶であつて、日本独特の經典」であり、「葉隠の精神を普及、発揚して、新時代に適応した日本国民の修養に資することは、きわめて必要なこと」という認識を示している。大正5年の大隈重信の序文と比べると、修養のテキストと考えている点で似ているが、いっそう昭和7年という時代も表している。前年の昭和6年には満州事変が勃発し、第二次若槻礼次郎内閣は昭和恐慌の中で有効な対策を打ち出せず、軍部をおさえられずに総辞職し、政友会の犬養毅内閣が成立していた（本書が出版された直後の昭和7年5月には五・一五事件が起こり、犬養毅内閣は崩壊する）。そのような中で書かれた序であった。

中村郁一の「感謝の辞」からは、大正5年の記念出版では収益をあげられず、石田・山本・田代の葉

隠記念碑建設の資金が得られなかったことがわかる。改撰四版は大隈重信没後十年記念とうたっていたが、中村は3月10日の陸軍記念日——日露戦争最大の陸戦といわれる奉天大会戦の勝利を記念した日——を選んで「感謝の辞」を書いている⁽⁵¹⁾。

おわりに

「葉隠」は、御側仕えの奉公人が学ぶべき心構えと佐賀の「国学」から構成されていたが、幕末には歴史史料として利用され、校訂・注釈書も編纂され、一部では読書会も催された。しかし、抄録の活字版『葉隠』が東京で発行されたのは明治39年、日露戦争期の武士道論かまびすしい世情を受けてのことである。この初版本が天皇に献上されたことから、「天覧」と乃木希典の「威光」を借りて、青年の修養が問題になっていた明治44年に、抄録本再版『鍋島論語葉隠』が地元の平井奎文館から刊行された。

武士道が日本民族・大和民族の精神として理解され、軍人精神としてではなく国民一般が祖先から受け継いだ精神と解釈されるようになった当時の風潮には、徴兵令改正後、国民皆兵が実現していった20世紀初頭の日本の状況が反映されている。徴兵令は明治6年に太政官布告で制定され、明治22年に全面改正が行われ、その後、明治28年には沖縄と北海道全域でも施行され、日露戦争でほぼ国民皆兵の原則が実現した。近世のように武士という特定の身分階層が戦うのではなく、成年男子は徴兵検査を受けて、国防を担う軍人として何年かは軍隊に属し、その義務を果たさねばならない。その組織を支える精神として武士道が読み替えられ、そのタイミングで抄録本『葉隠』の初版が出たのである。さらに日露戦争後、世の中で道德の退廃がみられた時期に、中村郁一は論語という言葉を入れて「葉隠」を修養書としてイメージさせ、鍋島という言葉によって佐賀の地域色を出し、抄録本の再版を『鍋島論語葉隠』とした。

大正5年にはじまる『鍋島論語葉隠全集』の刊行は、一般への周知という点では成功しなかったが、肥前史談会や葉隠研究会の設立など、地域史の興隆に刺激を与えたと思われる。しかし、「葉隠」を一気に有名にしたのは、佐賀出身の軍人たちの活躍であった。昭和7年1月の佐賀郡北川副村新郷出身の古賀伝太郎連隊長の戦死、同年2月の「爆弾三勇士」の戦死、同年3月の空閑昇少佐の死である。「爆

弾三勇士」の1人、江下武二一等兵は佐賀県神埼郡蓮池村の出身で、体に爆弾を巻き付けて敵の鉄条網を破壊したことから、職業軍人にもまさる勇敢さを発揮したとして国民的熱狂を呼んだ。また佐賀市水ヶ江町出身の空閑少佐は、上海近郊での戦闘により中国軍によって病院へ運ばれ、上海の日本軍へ送還されたが、後始末をした上で自決したことがもてはやされた⁵²。

『肥前史談』第五卷第三号（昭和7年3月）⁵³は、「葉隠精神の発露 壮烈鬼神を泣かしむ」と題し、「郷土出身の勇士が葉隠精神を発揮して壮絶無比の行為に出でたことは大なる郷土の誇りである否な国民全体の誇りである」とたたえ、「吾人は益々葉隠主義を高調して国民精神の作興に寄与するところあらねばならぬ」と結んでいる。こうして、「葉隠」はその後の歴史の中で、忠君愛国精神のシンボルになっていくのである。

注

- (1) 相良亨『武士の思想』（ぺりかん社、1984年）、菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社、2004年）、小池喜明『葉隠武士と「奉公」』（講談社、2002年）など。
- (2) 横田冬彦『『徒然草』は江戸文学か？』（『歴史評論』605号（2000年））。
- (3) 横田冬彦編『読書と読者』（平凡社、2015年）を第1巻とする「本の文化史シリーズ」を参照のこと。
- (4) 「葉隠」に関する研究と筆者の考え方については、谷口眞子「没我的忠誠論の再検討——『葉隠』新解釈の試み——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第56輯（2010年度）を参照。
- (5) 文学では池田賢士郎「近代の葉隠——その足どり 前編——」『葉隠研究』76号（2014年）、池田賢士郎「近代の葉隠——その足どり 後編——」『葉隠研究』77号（2014年）が「葉隠」関係書籍刊行の歴史を紹介しており、本稿はその成果に負うところが大きい。以下、（池田76）、（池田77）と略記する。
- (6) 山本常朝の略歴については、「山本神右衛門常朝年譜」『佐賀県近世史料 第八編第一巻』（佐賀県立図書館、2005年）。
- (7) 『三河物語・葉隠』日本思想大系26（岩波書店、1974年）。
- (8) 高野信治氏は『佐賀県近世史料 第八編第三巻』（佐賀県立図書館、2007年）解題で、石田一鼎『要鑑抄』の三誓願が民を安んずる「安民」を究極的に目指しているのに対し、常朝にはその種の政治意識がみえないと指摘している。たしかに、常朝は家老になって主君に諫言することが目標であるといいながら、藩政全体への目は持っていない。彼の眼目は個々人の具体的言行を通じて、奉公人としての主従関係と生き方を説くところにあった。後述する「葉隠聞書校補」が、「葉隠」にみえる人物の解説を主とし葉隠人名辞典であるかのような様相を呈しているのも、「葉隠」が政治論・統治論の書ではないことを

示していると考えられる。

- (9) 以下、「愚見集」『佐賀県近世史料 第八編第一巻』（佐賀県立図書館、2005年）。
- (10) 『佐賀県近世史料 第一編第一巻』（佐賀県立図書館、1993年）解題、『佐賀県近世史料 第一編第二巻』（佐賀県立図書館、1994年）解題（責任編集 小宮睦之）。なお聞書四の冒頭には、「此一巻、勝茂様御咄し。『御年譜』に無之事を書記す」とみえるので、藩の公譜編纂を意識して直話などを集めたと考えられる。
- (11) 小宮睦之「葉隠聞書校補の世界——幕末の葉隠——」『葉隠研究』56号（2005年）は、香焼島で読まれたのは、「葉隠」の中でも武士の心得を説いたエッセンスのダイジェスト版だったと指摘している。
- (12) 栗原荒野『分類注釈 葉隠の神髓』（昭和10年発行の復刻本）（青潮社、1996年）、木下喜作「神陽、枝吉平左衛門経種の研究」『葉隠研究』22号（1993年）。
- (13) 大園隆二郎「幕末、久留米藩にも伝わっていた『葉隠』」『葉隠研究』80号（2016年）。
- (14) 大石学編『近世藩制・藩校大事典』（吉川弘文館、2006年）。
- (15) 『佐賀県近世史料 第一編第三巻』（佐賀県立図書館、1995年）解題（編集責任 長野暹）。
- (16) 枝吉神陽について詳しくは、大園隆二郎『佐賀偉人伝 14 枝吉神陽』（佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2015年）。
- (17) 『佐賀県近世史料 第八編第一巻』（佐賀県立図書館、2005年）解題（小宮睦之執筆）。
- (18) 江頭慶宣「佐賀の尊皇派枝吉神陽の義祭同盟について（上）」『葉隠研究』80号（2016年）。
- (19) 「葉隠聞書校補」『佐賀県近世史料 第八編第一巻』（佐賀県立図書館、2005年）。
- (20) 木下喜作「神陽、枝吉平左衛門経種の研究」『葉隠研究』22号（1993年）によれば、藩主鍋島直正は天保8年に小城藩主による城主格昇格の願い出を拒否し、天保12年には蓮池藩主鍋島直典を寺社奉行に登用する幕閣の申し出を断るなどしており、天保14年正月には挙藩一致を説き、光茂以来の三家格式のしきたりを守るよう求めたという。小城、蓮池、鹿島三家と鍋島本家との確執は、19世紀になってもみられたのである。
- (21) 井上哲次郎・有馬祐政編『武士道叢書』上中下巻（博文館、1905年）。
- (22) 「井上哲次郎」『国史大辞典』。
- (23) 秋山梧庵編『現代大家武士道叢論』（博文館、1905年）。
- (24) 『太陽』第10巻第10号（1904年7月1日）。
- (25) 「浮田和民」『国史大辞典』。
- (26) 「佐藤正」『国史大辞典』。
- (27) 中村郁一編『葉隠』（丁酉社、1906年）。以下、これによる。
- (28) （池田76）。
- (29) 『風俗画報』第282号（1904年1月25日）。
- (30) 中村郁一編『鍋島論語葉隠』（平井奎文館、1911年）。以下、これによる。
- (31) 「田中光顕」「鍋島直大」『国史大辞典』。
- (32) 「乃木希典」『国史大辞典』。
- (33) 「織田万」『国史大辞典』。
- (34) 「福本日南」『国史大辞典』。福本日南は大正3（1914）年に『元禄快拳真相録』をまとめ、大正5年には中央義士会の幹事長にもなるなど、忠臣蔵文化にも造詣が深い。

- 35) 小笠原長生は慶応3年、老中小笠原長行の長男として江戸の唐津藩邸に生まれ、明治20年に海軍兵学校を卒業、大正7年に中将になった。東郷平八郎の副官や海軍大学校教官をつとめ、日露戦争では参謀少佐として大本営で働き、『東郷元帥詳伝』なども著した人物である。渡辺国武は弘化3(1846)年、信州諏訪郡高島藩士の家に生まれ、明治維新後は伊那県に出仕、高知県権令や大蔵次官などを歴任、明治25年の第二次伊藤博文内閣で蔵相に就任し、日清戦争中は戦費調達に尽力し子爵になった。渡辺昇は天保9(1838)年、肥前国大村藩士の子として誕生し、薩長連合実現の周旋にあたった人物で、大阪府権知事、大阪府知事、元老院議員、会計検査院長などを経て、明治37年から44年まで貴族院議員をつとめた。以上、「小笠原長生」「渡辺国武」「渡辺昇」『国史大辞典』。また「故副島種臣閣下談話」は明治38年に死去した副島種臣の談話を収録したものだが、20行にも満たない短文である。
- 36) 中村郁一編『鍋島論語葉隠全集』(葉隠記念出版会、1916年)。以下、これによる。
- 37) 「横山健堂」『日本人名大辞典』。
- 38) 「堀内文次郎」『日本人名大辞典』。
- 39) 古賀説一編『葉隠の雫』(佐賀市天明堂、1920年)。以下、これによる。
- 40) (池田76)。
- 41) 肥前史談会編『肥前史談』第一巻。以下、昭和60年の国書刊行会復刻版を使用。
- 42) 復刻版『肥前史談』第三巻所収。
- 43) (池田76)。
- 44) 鶴清気は文久3(1863)年に生まれ、副島種臣らの師であった石井龍翁(鉄)に漢学を学び、国学の心得もあり、南画・日本画・西洋画をよくしたという。佐賀中学の絵の先生で、退職後は佐嘉神社の神官になった。(池田76)。
- 45) 復刻版『肥前史談』第三巻所収。
- 46) 復刻版『肥前史談』第三巻所収。
- 47) 復刻版『肥前史談』第五巻所収。
- 48) 中村郁一編『鍋島論語葉隠全集』(改選4版)(佐賀郷友社・大坪惇信堂、1932年)。以下、これによる。
- 49) この部分は2年後の昭和9年の改撰5版になると、空閑少佐を賛美する文章に取り替えられるので、大隈の十年祭は出版のきっかけにすぎなかったと考えられる。
- 50) 「大隈信常」『日本人名大辞典』。
- 51) 大隈重信の祥月命日は1月10日で、大隈信常も正月付けで文章を寄せている。
- 52) (池田77)。
- 53) 復刻版『肥前史談』第五巻所収。

【付記】

本研究は、平成26年度～28年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(研究代表者・谷口眞子)「軍事史的観点からみた18～19世紀における名誉・忠誠・愛国心の比較研究」(研究課題番号26284089)による研究成果の一部である。